同じ大雨でも被害が違うわけ（自然現象と地域の条件）

同じ規模の大雨が降っても、地域によって被害の大きさが違うのはなぜか

① 人の住まない山地の谷



大雨	同じ
人や建物	ほとんどない
備えや対応	（人がいない）

被害の大きさ（模式）



小さい

崩れや増水は起きている

② 川沿いの低い土地に住宅地が広がった町



大雨	同じ
人や建物	多い
備えや対応	少ない

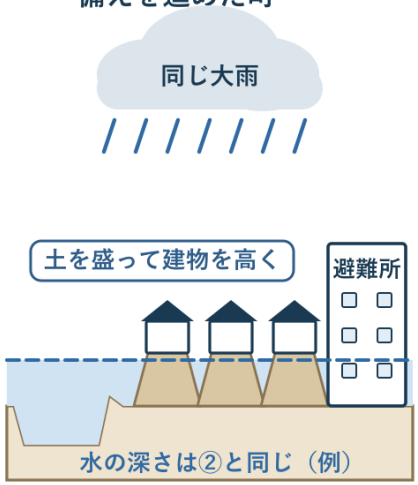
被害の大きさ（模式）



大きい

同じ雨・同じ深さの水

③ 同じ低い土地で、備えを進めた町



大雨	同じ
人や建物	多い
備えや対応	ある

被害の大きさ（模式）



②より小さい

被害はなくならない

被害の大きさは、3つの条件の組み合わせで決まる

自然現象（ハザード）
大雨の強さや続く時間、
起こる頻度（規模や頻度）

×

人口や建物の集まり方
危ない所に住む人や、
建物・施設の多さ（集中度）

×

備えや対応
建物の工夫、避難の計画と
訓練、情報の伝え方など

↓

被害の大きさ

施設や備えで被害を減らせるが、被害をなくすことはできない

※ 架空の地域の模式図。雨の強さ・水の深さ・被害の帯の長さは例で、実際の量を表したものではない。